



テクノロジー モダナイゼーション： AI 時代における データ戦略



はじめに

AI が企業のシステムやサービスに深く浸透するにつれ、既存データ環境の「複雑性」こそが、AI のポテンシャルを制約する最大の足かせとなります。AI という好機を最大限に活かすためには、モダナイゼーションの過程でこの複雑性を解消することが、あらゆる組織に課せられた責務なのです。

しかし、AI 活用のためのデータ環境を真に整備できている組織は、ごくわずかです。新たなツールに「データ」という燃料を供給するために、私たちはこの課題に挑むリーダーの方々へ、実践的な指針（ガイダンス）を提示します。それは、データサイロや硬直的なガバナンスといった基本課題の克服から、柔軟かつ反復的なデータ管理、そしてデータをビジネス価値にマッピングする高度なアプローチまで、多岐にわたります。今まさに、萌芽期の AI ツールを、実運用可能な「生産スケール能力」へと変革させる、新たな成熟度のステージへ踏み出すことが不可欠なのです。

業界全体の動向についてさらに詳しく知りたい方は、こちらの [Tech Modernisation ガイド全文](#) をご覧ください。

AI エンタープライズアプリケーションを支えるデータ基盤

歴史的に「コストセンター」と見なされてきたデータは、今やビジネスの成果を生み出す「燃料」へとその役割を変えました。私たちは、チーフ・データ・オフィサー（CDO）が、新たな収益エンジンとなるプロダクト開発を牽引できるよう、その権限と能力を強化しなくてはなりません。

AI 施策の導入およびスケールにおいて、以下のビジネス課題をどのように位置付けていますか？

40% が「データ基盤の整備」を AI 導入における最大の課題と回答

Everest Group Enterprise Digital Transformation Trends Japan 2025

データと AI は、次なるビジネストランスフォーメーションにおいて、まさに「両輪」の関係にあります。しかし、データ環境は、私たちがレガシーシステムに対して抱く懸念と同様、極めて複雑です。クラウド時代の幕開け以来、データは半ば有機的に増殖し続けてきた一方で、それを洗練・整備するための予算は、常に厳しい制約に晒されてきました。

2025 年の支出は、2024 年と比べてどのように変化しましたか？

データおよびアナリティクスへの投資を増やした企業は **67%**

Everest Group Enterprise Digital Transformation Trends Japan 2025

では、私たちが今日保有するデータの価値を、いかにして最大化すればよいのでしょうか。

鍵となるのは、既にテストされ本番稼働している既存のデータや API に対し、新たな光を当てることです。AI エージェントがこれらを直接活用できるようシステムを改修することで、その「再利用」から新たな付加価値を創出できるのです。

コグニザントは、ビジネスプロセスを高度化、あるいは加速させるための「エージェント・フレームワーク」を構築します。このフレームワークは、既存のデータと API を最大限に活用し、アプリケーションとデータソース間の統合レベルを飛躍的に向上させます。

実運用を阻むデータガバナンス

PoC（概念実証）のために AI ヘデータを供給するプロセスは、これまで比較的管理可能でした。しかし、それを本番（Production）スケールへと移行させることは、全く次元の異なる挑戦です。多くの組織が、緩すぎるか、あるいは厳格すぎるという、両極端なデータガバナンスの「矛盾」に突き当たっています。

これまでガバナンスは、しばしば「セキュリティ問題」として扱われてきました。その結果、「ガバナンスを効かせる」イコール「データをロックダウンする」という短絡的な発想に陥り、高度なデータ統合を実現できている組織は、ほとんど存在しないのが実情です。

しかし、ガバナンスには別のアプローチが存在します。アクセスを制限して進捗を停滞させるのではなく、日々の「働き方」そのものに、ガバナンスを埋め込むのです。

今日、私たちが理解しているのは、軽量（Lightweight）で、アジャイル、かつ反復的なアプローチこそが、ビジネスニーズへの即応性と、然るべき注意義務（Due Care）の維持という、二つの要請を両立させるデータガバナンスを実現する、ということです。

全てのデータが等価なわけではありません。例えば、財務データとマーケティングデータでは、ビジネス価値を創出するために求められる「制約」と「自由」が異なるため、それぞれに最適化されたガバナンスモデルが不可欠です。マーケティング部門には、絶えず変化する顧客のシグナルを捉え、パーソナライズされた動的なキャンペーンを迅速に展開するための「スピード」が求められます。対照的に、財務部門には、ステークホルダーの重要な意思決定を支えるため、収益とコストに対する「絶対的な信頼性」が要求されるのです。

データガバナンスにおける役割と責任分担の明確化も、多くの組織でいまだ発展途上の段階にあります。

私たちの協業経験から観察される事実は、データ資産に対する明確な所有権（Ownership）と説明責任（Accountability）を持つ組織ほど、データ品質、コンプライアンス遵守、そしてデータドリブン文化の醸成において、優れたパフォーマンスを発揮する、ということです。

AI 活用に向けたデータの準備

AI という好機の到来と共に、データ価値マップもその姿を変えました。社内ニーズを満たすための新たな価値抽出法や、データを収益化するための新たなマネタイズ経路が出現しています。今、鍵となるのは、既存データシステムのメタデータをいかに適用し、この価値マップを常に最新の状態に更新し続けるかを理解することです。

BI システムを通じてデータへの広範なアクセスを開放し、新たな価値創出を各チームの自発性に委ねる、というアプローチも考えられます。しかし、現場チームは依然として時間的リソースに乏しく、そもそも「何が可能か」さえ知らないケースも少なくありません。だからこそ、「データリテラシー向上プログラム」が、組織にとって強力な成長機会となるのです。また、自然言語による支援を提供する先進的な LLM ベースのインターフェースも、セルフサービス型のデータ活用を促進する大きな恵みとなるでしょう。

データ活用という好機は、許容できないリスクを冒すことなく、求められる柔軟性を確保するために、より広範な「モダンエンジニアリング」の枠組みの中で管理されなくてはなりません。

クラウドやデータ関連のベンダーは、データリテラシー向上の取り組みとして、様々な無料オンライン研修コースを提供しています。企業はこれらを戦略的に活用し、自社のデータ価値を解き放つために不可欠なスキルギャップを埋めるべきです。また、外部のテクノロジーサービス・コンサルタントが関与するプロジェクトでは、知識移転が確実に行われる体制を確保することも極めて重要です。これは、コグニザントにおいては標準的なプラクティスとなっています。

単一の標準が生む多くの例外

新たな時代に求められるのは、「単一の標準＋例外」という旧来の思考法からの脱却です。例外が常態化する悪循環を断ち切らねばなりません。全てのコアニーズとユーザーペルソナに適合するよう、少数のガバナンスモデルを設計すること。それにより、あらゆる義務を遵守しつつ、必要な場所でデータの価値を最大限に享受するための、実効性のあるデータアクセス制御が実現するのです。

データシステムやサービスにおける目標成果を定義することは、確かに容易ではありません。しかし、AI との本格的な統合を見据えた時、その価値が揺らぐことのない「データ成熟度」を高めるためのタスクは、あらゆる企業にとって普遍的な目標となり得ます。

- **データ基盤のマッピング:** 新しいデータモデル、API、高度な分析ツールでの利用など、あらゆる用途を想定し、データをいかにして取得・保管し、ビジネス全体のステークホルダーに提示しているかを理解します。さらに、現在の用途だけでなく将来の潜在価値も見据え、データをビジネス価値へとマッピングすることが不可欠です。
- **ミッションクリティカルなデータの特定:** 適切なデータが、適切なステークホルダーとシステムからアクセス可能であることを保証します。データの利用者（データサイエンティスト、アナリスト）や出力先（ダッシュボード）を明確に定義してください。データを具体的なアウトプットやインサイト（洞察）の価値と結びつけることで、AI 対応ツールやサービスへデータを供給する際の「確信度」が向上します。
- **データ価値マップの生成:** さらに、データ価値マップは、データの具体的な使途に焦点を当て、セキュリティとアクセシビリティの最適なバランスを見出す上で役立ちます。データ価値マップは、データのための DevOps、すなわち「DataOps」のパターンと連携させるべきです。これには、データインターフェース契約の適用、データマスキング能力の追加、そしてテストデータ生成の活用などが含まれ、イノベーションを阻害する障壁の撤廃に貢献します。

AI の能力進化に伴い、データ価値の可能性もまた、その様相を変えています。社内や顧客のニーズに応える新たな価値抽出法や、データを収益化するための新たなマネタイズ経路が出現しています。鍵となるのは、新たな AI 技術をいかに活用し、価値解放へと至るマップを描くかを理解することです。

BI システムを通じてデータを広く開放し、新たな価値創出を各チームに委ねる方法もあります。しかしチームは依然として時間に余裕がなく、何が可能なのかすら把握できていないケースも少なくありません。こうした状況において、データリテラシー向上プログラムは大きな成長機会となります。また、自然言語でサポートできる高度な LLM ベースのインターフェースは、セルフサービス型データ分析を大きく後押しします。

クラウドおよびデータベンダーは、データリテラシー向上の取り組みの一環として、さまざまな無料のオンライン研修コースを提供しています。企業はこれらのコースを活用し、自社データの価値を引き出すために必要なスキルギャップの解消を目指すべきです。また、外部のテクノロジーサービス・コンサルタントが関与するプロジェクトにおいては、知識移転が確実に行われるようにすることも重要です。これはコグニザントでは標準的な実践となっています。

AI に向けたデータの準備

コグニザントは、企業の AI 活用を加速させるため、多角的な視点からデータの準備状況（Readiness）を測定する「Data Readiness for AI」プログラムをご提供します。もはや、単にデータ品質を保証するだけでは不十分です。新たなデータソースやデータ型が導入される「速度」、そしてデータを「適格化」するスピードこそが、今や最重要課題となっています。AI サービスに真に対応するためには、データをより信頼性が高く、より価値あるものへと昇華させなくてはならないのです。

いかなる AI への旅路であれ、「責任ある AI（Responsible AI）」は不可欠な検討事項です。データ倫理は、コグニザントの「責任ある AI フレームワーク」の中核を成し、そこにはデータとデータソースのバイアスを低減する「FAIR 原則」も含まれます。企業は、データを AI システムに統合する前に、組織としての倫理方針を確立しておくべきです。そのためにも、「責任ある AI」への投資は、導入プロセスの後期ではなく、可能な限り早期に開始しなくてはなりません。

モダンなデータアーキテクチャは、信頼性の高いデータのプロビジョニング、ソーシング、そして統合を通じて、より迅速な AI 実験を可能にするべきです。信頼できるデータセットを可能にする「データスコアリング」は、信頼性と堅牢性を兼ね備えた AI モデルの誕生にも寄与します。新たなデータ型を迅速にオンボードし、モダンなデータレイクやレイクハウスへ統合し、そしてデータサイエンティストにアクセス権を付与する能力。これこそが、AI サクセスの鍵なのです。

私たちは、データの基本を超えて、その先を見据えなければなりません。AI ユースケースの礎となるのは、「SMART」なデータ資産です。信頼性、アクセス性、スピード、適時性、可用性、そしてアクセシビリティ。これらが高めることでデータを可能な限り「SMART」にすること。それこそが、持続可能な AI（Sustainable AI）のための強固な基盤を築くのです。

データを価値へと転換するために

私たちは既に、世界中のお客様との協業を通じて AI エージェントを展開し、データ価値マップを新たな業務効率化という実質的な機会へと結びつけています。一例として、ある大手小売企業では、在庫レベル、物流、配送センターのデータ、そしてコールドチェーン要件といった、従来は分散していたデータセットを AI エージェントが統合・分析。店舗ネットワーク全体の在庫補充計画を高度化しました。薄い利益率で経営を行う環境下では、良質なデータこそが、効果的なオペレーションの生命線となるのです。

ファッションから金融まで、多岐にわたる業界で、コグニザントの Neuro™ AI プラットフォームが実現するデモンストレーションは、机上の理論を、迅速な価値提供という「目に見える成果」へと転換させます。私たちは、このデモンストレーションを、主要ステークホルダーとの構造化インタビューやワークショップと組み合わせ、データ価値マップを共創します。このアプローチにより、想定を上回るスピードで、測定可能なビジネス成果の向上を実現するのです。

AI データを実装へとつなげる

あらゆる企業に通用する、データフローと制御を改善するための万能薬は存在しません。データの価値を解き放つ正しい道筋を見出すには、まず「真の課題」を特定することが絶対条件です。コグニザントは、企業の現状（As-Is）分析にどこから着手し、そのデータシステムとプロセス全体に潜む課題と機会をいかにして白日の下に晒すべきか、その方法論を熟知しています。

[Cognizant Neuro™ AI プラットフォーム](#)を活用し、私たちはCIOをはじめとするお客様のリーダーと、あるべき未来の姿（the art of the possible）をリアルタイムで探求し、その実現への道筋を具体化します。お客様が目指すビジネス成果に直接的に結びつく形で、AIをデータ環境にどう適用すればその真価を解き放てるのか。その姿を、私たちは実証（demonstrate）してみせることができます。

私たちの戦略的支援は、第三者としての客観的な信頼性をご提供するだけではありません。お客様をいかなる継続的コミットメントにも縛ることなく、目標とすべきデータアクセスと制御のシナリオを理解し、そして実現することを可能にします。さらに、お客様のビジネス成果に連動する、リスクゼロの商用モデルをご提案することも可能です。

To learn more how Cognizant can help enable data in the era of AI:

Email: contact_au@cognizant.com

www.cognizant.com/au/en/cmp/technology-modernisation-data-in-the-era-of-ai



Cognizant (Nasdaq-100: CTSI) engineers modern businesses. We help our clients modernize technology, reimagine processes and transform experiences so they can stay ahead in our fast-changing world. Together, we're improving everyday life. See how at www.cognizant.com or [@cognizant](https://twitter.com/cognizant).

World Headquarters

300 Frank W. Burr Blvd.
Suite 36, 6th Floor
Teaneck, NJ 07666 USA
Phone: +1 201 801 0233
Fax: +1 201 801 0243
Toll Free: +1 888 937 3277

European Headquarters

280 Bishopsgate
London
EC2M 4RB
Phone: +44 207 297 7600

India Operations Headquarters

5/535, Okkiam Thoraiappakam,
Old Mahabalipuram Road,
Chennai 600 096
Tel: 1-800-208-6999
Fax: +91 (01) 44 4209 6060

APAC Headquarters

1 Fusionopolis Link, Level 5
NEXUS@One-North, North Tower
Singapore 138542
Phone: +65 6812 4000

© Copyright 2025–2027, Cognizant. All rights reserved. No part of this document may be reproduced, stored in a retrieval system, transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording or otherwise, without the express written permission of Cognizant. The information contained herein is subject to change without notice. All other trademarks mentioned herein are the property of their respective owners.